

キャン ドウ

# CanDo 15年の歩み

1998年～2012年 特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会(CanDo)



1998年7月 会報3号



2003年9月 会報24号



2008年6月 会報43号



1999年12月 会報9号



2004年12月 会報29号



2009年12月 会報49号



2000年9月 会報12号



2005年12月 会報33号



2010年12月 会報53号



2001年5月 会報15号



2006年12月 会報37号



2011年7月 会報55号



2002年12月 会報21号



2007年6月 会報39号



2012年9月 会報60号

15年を振り返り、これからを考える	3
CanDo、そしてケニアと日本、世界の15年	4
ケニア共和国ムインギ東県*・ミグワニ県における活動	6
教育	8
地域保健	10
学校保健	12
環境	14
ナイロビ市ムクル・スラム群における活動	15
調査	16
国内での活動	17
組織	18
スタッフ	19
元スタッフからのメッセージ	23
支援・事業委託元団体	



\*1998年、CanDoは東部州ムインギ東県ヌー郡で活動を開始し、ムイ郡、グニ郡に展開していきました。3郡はムインギ東県に、同ミグワニ郡はミグワニ県に変わりました。

## 15年を振り返り、これからを考える

代表理事 永岡 宏昌

CanDoをケニアで設立して15年がたちました。多くの方々からのご支援のおかげで、順調に組織を設立し、初期段階でめざす方向性を確定しました。それにそって、多くのスタッフ・インターンがケニア・ムインギの現場に関わり、ケニア人スタッフ・専門家と一緒に当会の活動スタイルと教育・保健・環境に関わる新たな事業の形成、それらの質の向上に取り組んできました。

当初より活動の根幹にあるのが、住民が、主体であり、自ら「豊かさ」を規定して、自律的に達成していく「力」をつけることに、私たちが協力するということです。そして、その力は、他者と対立・競争して勝ち取っていくための力ではなく、知識・技能・視点などを高めて他者との協力関係を強めて豊かさを実現するための力です。

活動を開始した1998年ごろのケニアは、モイ政権下で海外からの援助がほとんど止まっている時期で、ムインギの小学校には、政府から教員の派遣と給食の供与はあるが、それ以外の投入はない状況でした。そのなかで、住民参加による教室建設は、住民にも教員にも関心が高く、自分たちで集められる建設資材を集め、職人も雇用し、当会から技術指導とセメントやトンなど購入する資材を供与する役割分担が定着しました。2003年からのキバキ政権による初等無償義務教育の開始は、ムインギでも多くの子どもの小学校入学につながり、新たな教室が必要となり、2006年に当会は住民参加での教室建設・補修を最も多く行ないました。しかし、政府系の複数の資金が、小学校の教室建設に充てられるようになると、これら政府系のほうが、大雑把に資金が入り、職人給与や、事業を監督する校長や保護者役員への手当も盛り込めることもあってか、当会の建設より優先されるようになりました。

当会は、政府系の支援が受けられない小さな学校に着目し、少ない保護者でも教室がつかれるように、学校運営能力を高めるための協力をいれました。一方、2009年ごろから政治の関心が小学校から高校の充実に移行したこと、教育分野の援助で大規模な不正が見つかり資金がとまったことなどが重なり、政府系資金による教室建設はみられなくなりました。

政府が、子どもの教育を安定して保障することが基本ですが、このケニアでの15年をみても、一旦政府の投入が始まっても地域のニーズと関わらないことで消えてしまいます。このことは、住民が、子どもの最低限の教育を安定的に保障することが重要であり、そのための意識・知識・視点などを高め続ける必要があります。今後も、当会の協力の意義をこの点に求めていきたいと思えます。子どもの健康の保障においても、同様と考えます。

CanDoの15年 ケニア			
全体/教育	保健	環境	スラム
1998 教科書配布ーム インギ県ヌー郡  1999 教室建設・補修 1999 NGO 登録	1998 診療所整備への側 面協カームイ郡   2001 出産適齢期女性の 基礎保健研修 2002 保健のグループ活 動支援	2000 小学校で環境活 動  2001 研究発表会	1999 奨学金支援 1999 補習授業
2003 中間評価  2004 基礎教育改善事 業ーヌー郡  2006 教育・健康改善事 業ーグニ郡 2006 23校23教室を建 設、3校9教室を補修 2007 事業評価	2003 幼稚園に参考書配 布、教師に保健研修  2004 エイズ学習会 2004 伝統助産婦研修 2005 エイズ子ども発表 会 2005 幼稚園へ体重計と 成長の記録カード 2006 小学校の教員対象 エイズ教育研修		2006 受講経験のある 大学生が講師に
2009 学校運営能力向 上と教室建設事業ーム インギ東県  2011 初等教育普及事 業ーミグワニ県	2008 エイズと母性保護 の公開学習会 2008 男性対象の基礎保 健研修  2010 エイズ・リーダー 研修 2010 早期性交渉予防研 修  2012 幼稚園の保健活動 促進	2008 村で環境活動	

ー国内ー	15年の動き		
	ケニア	日本	世界
1998 設立  1999 特定非営利活動法 人(NPO)化  2001 JNNE 入会  2002 事務所を移転 2002 NGO 相談員	1998 エルニーニョによる 大雨 1998 米国大使館爆破 1999 干ばつ 1999 エイズ国家災害宣言  2002 キバキ大統領就任	1998 NPO 法施行 1998 TICAD II    2001 米国同時多発テロ  2002 世界エイズ・結核・ マラリア対策基金	2000 ダカールで「万人の ための教育」の枠組み 2000 ミレニアム開発目 標(MDGs) 2001 米国同時多発テロ  2002 世界エイズ・結核・ マラリア対策基金
2007 JANIC 入会	2003 初等教育無償化 2003 エイズ教育を本格 的に導入  2005 教育分野支援計画 を開始  2006 干ばつ  2007 選挙後暴力	2003 TICAD III  2004 JICA 組織改編	2003 イラク戦争
2009 連続勉強会開始  2010 事務所を移転  2011 ブックレット・電子 ブック発行	2008 連立政権樹立  2009 行政機構の細分化 2009 干ばつ  2010 新憲法制定  2011 ICC 予審裁判 2011 干ばつ 2011 ソマリア侵攻	2008 TICAD IV  2009 政権交代   2011 東日本大震災	2008 リーマン・ショック    2011 南スーダン共和国 独立  2012 国連持続可能な開 発会議

## ケニア共和国ムインギ東県、ミグワニ県における活動

### ■教育

1997 年秋、NGO 設立の準備を進めていた CanDo は、開発協力を必要としていて、かつナイロビから公共交通機関で通える地域を比べた結果、東部州ムインギ県\*1 を候補地として、調整員が住み込んで、調査を行ないました。

度重なる干ばつで、土地がやせ、多くの人が都会に出ていく中、もっとも貧しいといわれていたヌー郡では、小学校に入学した子どものうち、卒業\*2 できるのは3分の1ということを知りました。当時は保護者が負担\*3 していた教科書も、住民の手で建てる教室も不足していました。そのような状況でも、地域の大人たちは、子どもの教育に意欲的でした。

### 小学校への教科書配布から、保護者と協力して教室建設へ

CanDo は 1998～2000 年、ヌー郡とその西隣のムイ郡(当初はヌー郡ムイ区)の小学校に対して、3～4 人で1冊を使える数の教科書の配布を、最初の活動として行ないました。同じ教科書を次の期の子どもたちも続けて使えるように、保護者は保管に工夫をしました。

教科書配布で多くの小学校を訪問して、泥壁とかやぶき屋根の仮設の教室で、あるいは木の下で青空授業、と教室不足の状況がいろいろとわかってきました。

1999 年、保護者と協力して、ヌー郡で教室建設と補修を開始。2000 年に最初の教室が完成しました。続いて 2001 年にムイ郡、2005 年から北隣のグニ郡、合わせて 3 郡—現ムインギ東県—での教室建設は、2011 年で完了しました。

2011 年、ミグワニ県(旧ムインギ県ミグワニ郡)でも始めました。

教科書、教室だけでなく、教員の教える意欲も問題で、CanDo は 2000\*4～03 年、教員トレーニングをヌー郡で実施しました。

\*1 ムインギ県は分かれて、CanDo の活動地はムインギ東県になり、州の区分もなくなりしました。

\*2 小学校は8年、高校4年、大学4年の8-4-4 制。

\*3 政府は教員の給与を負担。当時は、運営経費も保護者負担。

\*4 2000～05 年、机いす(一俵)への支援も実施。

### 教室建設での保護者と CanDo の役割分担

保護者の役割は、現地の資材を収集・調達—石、砂利、砂、水、焼成レンガ／資材管理／職人を雇用し、監督／単純労働を提供。

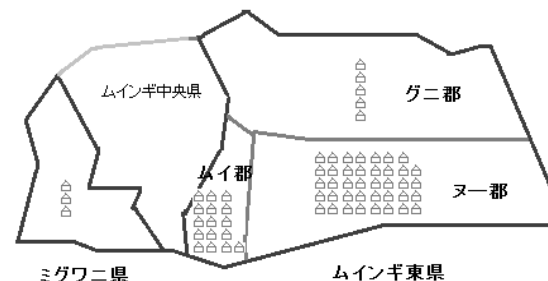
CanDo は、外部資材・道具を供与—セメント、鉄筋、トタン、材木など／専門家が技術指導／建設マニュアルを提供します(当初から恒久的な教室建設の技術を、地域に移転することを考えていました)。

### 1 教室+1 基礎

2003 年の初等教育の無償化で入学者数が急増した 2004 年、CanDo は「1 教室+1 基礎」の建設を行なうことにしました。1つの教室を建設する際に、隣にもう1教室の基礎と床部分までを CanDo が協力して造ります。その上の部分から保護者だけで造って完成させるので、基礎からに比べて、自力での教室建設の可能性が高くなります。他の資金等を得て、多くの学校で2教室目が完成しています。

### 建設とともに、学校運営能力向上も目的に

2010 年、新たに設立された小学校を対象として、ムインギ東県教室建設を始めるにあたり、これまで意図はしていた保護者の学校運営能力向上を活動の目的に加えることにしました。現地資材収集の前にその覚書を締結。運営面と技術面の学習会に保護者は参加し、いろいろな知識、技術を見つけてから、作業に入ります。



1999～2012 年 教室建設・補修を 実施した学校数	
ムインギ東県	
・ヌー郡	39 校
・ムイ郡	16 校
・グニ郡	5 校
ミグワニ県	3 校
計	63 校

## ■ 地域保健

教育への協力から始め、保健、環境を総合した地域開発を目指していた CanDo は、医療施設が充実していないヌー郡ムイ区(後にムイ郡)において、1998 年に保健活動の実施可能性調査を行ないました。母子保健を担える保健センターとなるための増設計画が止まっていたムイ診療所\*<sup>1</sup> に対して、資金、備品・機材購入などについて助言を行ない、整備のための側面支援をしました。

2001 年 11 月～02 年 3 月、保健活動、5 歳未満児の健康、母親の保健の知識、水源の水質の医療サービスの調査を行ないました。4 割以上の子どもが栄養不良で、4 分の 3 が何らかの疾患があり、家庭での水の保管法に問題あることなどが、分かりました。

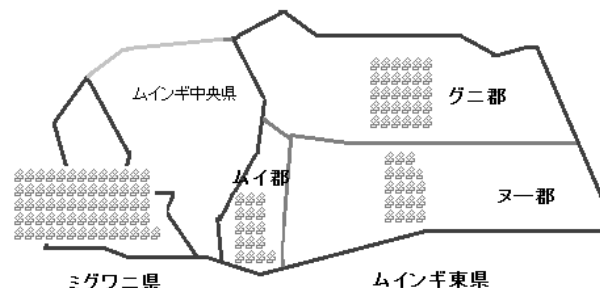
### 住民を対象に基礎保健研修

当初、CanDo は、村の保健リーダーである地域保健師(CHW)や伝統助産婦(TBA)の育成を考えていました。けれども、リーダーから地域社会への保健の知識や技能の波及が進んでいないと見られたことから、2001 年、CanDo は出産適齢期(18～30 歳)の女性を対象に、基礎保健研修を開始。3 日間のコースで、母子保健と家族計画、栄養、水と衛生、一般的な病気、性感染症とエイズについて学びます。ムイ郡では 2001～06 年、グニ郡で 2005～07 年、ヌー郡で 2006 年に実施。修了した女性や行政官から「男性にも研修を」という声があがり、グニ郡で 2008 年、ヌー郡、ムイ郡で 2009 年に男性を対象に 2 日間のコースで研修を行ないました。2012 年に開始したミグワニ県では対象は男女一緒にして、3 日間のコースとしています。

2002 年から、修了した人の知識や技術を定着させ、自主的に地域で保健活動を行なうグループ作りを働きかけるために、復習の研修(グニ郡では第 2 課程)を実施。トイレ作りや、食器を置く棚作りなどのグループ活動に対して、必要な道具の貸与を行ないました。

県保健局からの要請で、2004～05 年、家庭での出産の介助を行なう伝統助産婦(TBA)の育成のための研修を行ないました。

\* 看護師 1 名が常駐。ムイ郡(現ムイ郡中央)にある県立病院まで、約 30km。



2001～12 年 基礎保健研修の 参加者数	
ムイ郡東県	
・ヌー郡	373 人
・ムイ郡	316 人
・グニ郡	605 人
ミグワニ県	1323 人
計	2617 人

### エイズ学習会とエイズ研修

2004 年、ヌー郡における学校保健の調査で、エイズ問題が深刻なことが分かり、教員、保護者、地域住民を対象とした小学校でのエイズ学習会を開始。2005 年からムイ郡、2007 年からグニ郡でも始めました。住民組織が申請して実施する形の 3 時間程度の学習会に、参加者は集まることもあれば、集まらない場合もあります。「学校だから来ない」という声から、地域の集会所での開催に変えたのですが、状況は変わりません。促進のために 2005 年エイズ研修を始め、対象を 2007 年から住民への働きかけを期待できる地域リーダーに、2008 年には村の公的リーダーである村長老にしました。また、2008 年、申請によらない公開学習会を開くことにし、同様に地域住民全体に伝えたい、と考える母性保護をテーマに加えました。この形になって、参加者数は増えました。ムイ郡東県での経験から組み立てた、2011 年からのミグワニ県での地域保健においては、エイズと母性保護の公開学習会から始めています。

### エイズ・リーダー研修

エイズに関する知識や情報を収集して、住民に教えていける地域のリーダーを養成することを目的に、2010 年、ムイ郡東県で研修を始めました。3 日間のコースを履修したリーダーは、自ら参加者を集めてエイズ学習会を開催します。この研修は、2011 年からのムイ郡東県からの退出以降期間も継続しています。

## ■ 学校保健

### 幼稚園における保健への協力

ケニアでは就学前の子どもたちのための施設として幼稚園があり、ムインギ東県では多くは小学校に併設されています。5歳未満児の健康調査を始めた2001年、同じムイ郡において、CanDoは幼児の育成に関する調査も行ないました。診療所での母子保健の活動はなく、幼稚園においては勉強<sup>\*1</sup>の面が期待され、健康への関心は向けられていない状況で、教師の保健の知識や技能は不足していました。翌年、行政と話し合っ、2003年、ムイ郡の幼稚園に幼児育成に関する参考図書を供与しました。

**保健研修**—2003年には、ムイ郡において教師への3日間の基礎保健研修も行ないました。2008年、グニ郡で5日間の日程、2011年、ヌー郡、ムイ郡、グニ郡で3日間の日程で実施。2011～12年、ミグワニ県では、知識が主の前期課程(3日間)と実践に重点を置いた後期課程(2日間)に分けて行ないました。

**エイズ教育研修**—2008年、ヌー郡とムイ郡で教師への2日間の研修を実施。そこでの話し合いで、刃物の取り扱いの注意を歌にして授業に取り入れた例や、子どもが置かれている危険性について保護者に伝えている例などがあがりました。

**体重計の供与と成長の記録カードの配布**—2004年、ヌー郡で行なった調査で、幼稚園では身体計測などを記録していないところが多く、健康状態の把握ができていないことが分りました。2005年、ムイ郡とグニ郡、2009年にグニ郡で、体重計の供与と成長を記録する健康カードの配布を始めました。家族構成や予防接種、病気について記載する欄も設けています。カードの配布は、ムインギ東県からの退出以降期間も継続しています。ミグワニ県では2012年に開始。

**保健活動の促進**—2012年、ミグワニ県の5つの保育園で、保護者を対象とした保健活動を始めて、子どもの健康に関する学習会を開き、手を洗う用具、食器置き棚、遊具作りの実践を行ないました。

### 小学校教員へのエイズ教育研修

2004年にCanDoがヌー郡で行なった、小学校における保健教育の調査で、エイズ教育について想定していた以上に高い必要性があることが分かりました。ケニア<sup>\*2</sup>では2003年から、小学校の低学年からさまざまな教科でエイズを扱うことになっていましたが、教員の知識は正確でなく、また不十分で、予防法にも偏りがありました。

実質的なエイズ教育のきっかけとして、2005年にヌー郡においてエイズ子ども発表会と、準備のため教員に対してエイズの基礎知識と教科教育との関連付けを学ぶ研修を行ないました。2006年にはライフ・スキル<sup>\*3</sup>も取り入れた、2日間のエイズ教育研修として実施。2007年、3課程<sup>\*4</sup>、各2日間の集中研修に発展させました。ヌー郡、ムイ郡、グニ郡において2007年に第1課程、第2課程、2009年に第3課程を始め、2010年に終了しました。ミグワニ県では2011年に研修を開始。参加していない教員への普及のため2006年に始めたエイズ公開授業とエイズ子ども発表会の開催を、研修を受けた教員に促しています。

### 小学校教育・保護者・子どもたちを対象に早期性交渉予防の取り組み

小学校の女児の早期妊娠とそのための中退の問題がある小学校で、子どもたちに予防する教育を行なってほしい、とムインギ東県教育局長からCanDoへ要望が出たのは2010年のことです。その後、すべての小学校での妊娠予防をという構想も局長から提示されました。検討を重ねて、特定された学校を訪れる3日間の早期性交渉予防の取り組みを始めました。1日目は教員向け、2日目は保護者向けの研修と、教員と保護者の話し合いを行ないます。その後の子どもへの保健トークにおけるコンドームの扱いや、性交渉をはじめとするさまざまなリスクから子どもをどのように守っていくかを話し合います。3日目のトークは、CanDoでは唯一の子どもを直接、対象とした活動です。10～19歳の体と気持ちの変化、ライフ・スキルの伸ばし方、そして「大人になること、赤ちゃんが生まれること」について必要な保健の話を専門家から学びます。退出以降期間も継続し、ミグワニ県では2012年に始めました。

\*1 ケニアの教育言語は英語(小学3年まで母語—この地域ではカンバ語—を使用)。就学前にアルファベットと数字の学習が必要です。

\*2 1999年「エイズ国家災害宣言」。

\*3 世界保健機構(WHO)の定義では「個人が日々の要求や挑戦を効果的に対処できるようにする、適応的で前向きな行動のための能力」。

\*4 第1課程は理学的知識と陽性者への理解や共生、第2課程で低学年と言語科目、第3課程では高学年向けの教授法を学びます。

## ■環境

総合的な開発のうち環境保全に関して、1998年にムインギ県(当時)ヌー郡とムイ郡で調査を行ないました。年間の降水量は500mm程度の半乾燥地で、頻発する干ばつや表土流出などで環境劣化が進み、住民が兼業としている農業、牧畜に影響が出ています。けれども、行政からの保全事業の協力の呼びかけに対して、住民は深刻にとらえていないために進んでいない、と98年の調査で考えました。99年の調査では、郡の農業事務所から、活動が休止している荒廃地の植生復興事業への協力を要請されました。労働の対価の食料供与がなくなったため止まっていて、CanDoにも食料への期待があることが判明しました。地域での活動は断念し、小学校における環境教育と環境活動を出発点とすることにしました。

### 小学校での環境活動

2000年、ヌー郡の全小学校の教頭を対象に、環境活動と教科教育の関連を示す学習会を開催し、また、地域の環境に関する子どもの知識や意識について調査をしました。その過程で環境活動に関心を示した6校で、学校菜園、植林などのモデル事業を開始。専門家による技術指導、資機材の供与を行ないました。2001年、理科教育との関連付けとして、実践的な理科学習の研究発表会を開き、郡の全小学校の8年生、教員を前にモデル校の生徒が発表<sup>\*1</sup>しました。2002年、理科教員同士の情報交換の場としてフォーラムの設立を促し、そこで選出された運営委員会にCanDoが協力して2回目の発表会を開催しました。2003年<sup>\*2</sup>の中間評価で、モデル校から周辺校への波及効果があまりみられないなど、課題が明らかになりました。2004年に、ヌー郡の全小学校の理科教員を対象に学習会<sup>\*3</sup>開きました。2005～06年、保護者も参加しての環境活動ができていた4つの小学校のグループに小規模の資金を供与。校庭での植林などが行なわれました。2007～08年、グニ郡で3校、2009～11年、ムイ郡で4校において、環境活動を行ないました。

\*1 テーマは植物、リサイクル、天候、土壌流出・保全 他。

\*2 資金面から協力を一時休止した年。

\*3 植物と気象のどちらかを選択。

### 山肌の村での環境活動

2008年から、グニ郡とムイ郡で地域住民を対象とした環境への取り組みも始めました。グニ郡では1つの保健グループを対象として、2009年まで、樹木の育苗、涸れ川での井戸掘りなどに協力。ムイ郡では、辺縁の山肌にある村々の住民を対象に選びました。土地の荒廃とともに、地域の中心から離れていて情報や行政のサービスからも遠いことも問題でした。9つの村で、生活や生業に役立つ技術を伝える学習会を開き、日常の実践につながるよう、2011年まで家庭訪問を行ないました。土壌に関する技術は、堆肥を利用した改善と、等高線に沿って溝を掘り、土を盛り上げてテラス(段)を形成する保全。測量は、3本の木の棒をAの形に組み、石を結んだひもを下げた「Aフレーム」という簡単な方法です。また、麻の袋を利用し、水を節約する野菜栽培、ニーム<sup>\*4</sup>の葉を利用した害虫予防を伝えました。欠けがちな緑黄色野菜として、インゲンマメの葉を乾燥させて保存することや食用になる野草の利用といった栄養面の技術もあります。

\*4 センダン科の樹木。葉に虫除け効果がある成分があります。

### 小学校の保護者を対象とした環境活動

ミグワニ県も半乾燥地ですが、ムインギ東県よりは降水量がやや多く、起伏があり、傾斜地に建てられて、土壌侵食が深刻な学校があります。2011年、教室の基礎が露出し、倒壊寸前の小学校で、保護者を対象に環境活動を始めました。留め壁を作って、土を埋め戻す、基礎の保全作業を実施。2012年<sup>\*5</sup>は3校で行ないました。また、2012年は他の2校において、校庭全体の地表水の排出と土壌保全について、公衆衛生官、教育官と共同で調査を実施しました。

別の3校では、子どもの健康状態の改善を目的に、学校菜園作り等の活動を実施しました。うち2校では、収穫した野菜を利用した給食作りが行なわれました。世界食糧計画が半乾燥地で行なっていた、米国産メイズ中心の学校給食が2008年に終了し、その後の政府からの資金供与が途絶えがちな状況で、保護者が穀類と豆類を持ち寄る、自律的な給食作りの意義が確認されました。

\*5 2013年からは、教室建設関連の活動としています。



## ナイロビ市ムクル・スラム群における活動

### ■教育

ケニアの村落部で CanDo が活動を始めるきっかけとなったのは、首都ナイロビのスラムの厳しい環境での人々の暮らしと、それでも続く村からの流入に対して、何ができるか、という問いかけでした。設立した1998年、ナイロビの南東、ムクル・スラム群を構成するルーベン・スラムの高校生への奨学金支援を会員有志が始めました。対象は他のNGOが支援を取りやめたため、学業の継続が困難になった1~2年生です。99年、CanDoの活動のひとつとして、全員が卒業する2000年まで続けました。また、99年11月から99年3月まで、スラムの暮らしと出身地の村の状況を調査しました。

### 学校の休暇期間の補習授業

スラムの住居には、高校生が勉強する場はありません。CanDoは1999年、学校の年3回の休暇期間、4月、8月、12月に奨学生に補習授業を始め、2000年、ムクル・スラム群に暮らす高校生を対象を広げました。ケニア人教員を講師として、教科だけでなく社会科見学などを行ないました。2005年、手当のことで講師との間に問題が起こり、地域の出身者を新たに採用。2006年、講師のほとんどが、以前補習授業を受けた地域の大学生となりました。継続性を考えて、期間を10日間に短縮し、教科にしぼることにしました。2007年8月、12月は総選挙のための治安悪化への懸念、2008年4月は連立政権への不満による暴動で実施しませんでした。2009年、講師が運営に対して意欲的になって授業料の納入率も向上、2010年からCanDoのスタッフがかわれず、講師のみで実施しています。2012年8月は全国一斉に補習授業を禁止する通達があったため、取りやめ、12月も見合わせました\*。

当初、スラムでの活動の展開を探ろうとしていましたが、村落部とは別のケニア人の生活に向き合う場として、協力を続けています。

## 主な調査と評価

- 1997年: ケニア共和国・現ムインギ東県で調査  
1998年—ヌー郡での教育協力を開始
- 1998年: ムインギ東県ヌー郡、ムイ郡で地域保健の調査  
ヌー郡、ムイ郡で環境保全の調査  
1999年—スラムでの活動を加える
- 1999年: ヌー郡、ムイ郡で地域保健の調査  
ヌー郡、ムイ郡で環境保全の調査  
ナイロビ市ムクル・スラム群ルーベン・スラム他で調査  
(~2000年3月)  
2000年—環境活動を開始
- 2001年: ムイ郡で幼児育成の調査  
ムイ郡で地域保健(~02年3月)の調査  
2001年—ムイ郡での地域保健を開始  
2003年—幼稚園での活動を開始
- 2003年: ヌー郡で中間評価の調査
- 2004年: ヌー郡で幼児育成の調査  
ヌー郡で学校保健の調査  
グニ郡で調査  
2004年—エイズ関連の活動を開始  
2005年—学校保健を開始
- 2006年: グニ郡で幼児育成の調査  
ヌー郡で事業評価(~2007年1月)  
2006年—グニ郡での活動を開始
- 2009年: ミグワニ県で調査  
2011年—ミグワニ県での総合的な活動を開始  
ムインギ東県での退出以降期間に入る
- 2011年: マシंगा県で調査  
ザンビア共和国で調査
- 2012年: マシंगा県で調査

\* 2013年4月、講師が教育省から実施の許可を得ました。



## 国内での活動

### ■ 広報

#### 会報等の発行とウェブサイト、ブログ、facebook

1998年2月、会報『CanDo アフリカ』を創刊。同年は5回、99年以降、年4回発行(A5判、8~12ページ)し、3月は活動報告と計画を掲載。1999年に始めたウェブサイト、2006年からのブログ、2012年のfacebookと合わせて、それぞれの形で活動を伝えています。

99年、『ケニアのスラムの暮らし そしてそこに住む高校生のこと』(A5判、28ページ)、2011年、ブックレットと電子ブック『ケニアの人々—その抱える課題と参加型開発協力の役割』を発行しました。

#### イベントでの出展

1999年からグローバルフェスタ(旧国際協力フェスティバル)、2001年に始まったアフリカン・フェスタに出展して、活動紹介や物品販売などを行なっています。首都圏以外では、2005~08年、大阪のワン・ワールド・フェスタに出展。2005年、06年、北海道で在住の理事が活動紹介や物品販売、講演を行ないました。

#### 報告会と勉強会

1999年から他団体からの依頼で、2000年からはCanDo主催でも行なってきた報告会や講演会に加えて、2009年、連続勉強会\*<sup>1</sup>を始めました(~11年、全10回、12年は5回)。

### ■ 他団体との連携・協力

2001年、設立された教育協力NGOネットワーク(JNNE)に入会、運営委員等を務めています。2007年、(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)、2011年から動く→動かす\*<sup>2</sup>の正会員。2003年と08年、アフリカ開発会議(TICAD)におけるNGOネットワークで事例提供をし、会議に参加。ケニアではODA・NGOネットワークのメンバー。

以上のほかに、活動経験の提供や講師派遣を行なってきました。

## 組織

### ■ ケニアの NGO、日本の特定非営利活動法人(NPO)

1997年9月、ナイロビから東京に送られたNGO設立の相談がまをもって準備を開始。11月にナイロビ事務所を設立。12月23日、東京で、CanDo—アフリカ地域開発市民の会の設立総会を開き、1998年1月1日をもって設立、趣旨、定款、98年度活動計画などを決定、理事11名、監事1名\*<sup>1</sup>が選任され、代表に永岡宏昌が就任しました。事務所を文京区千駄木に設けました。

1999年3月22日、年次総会兼、特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会\*<sup>2</sup>設立総会を開催。設立認証の申請を決定。役員改選で、理事14名、監事1名\*<sup>3</sup>が選任され、代表理事に永岡、事務局長に國枝信宏が就任しました。9月、ケニアでNGO登録。11月17日、特定非営利活動法人として正式に設立。2000年以降、2011年を除き、3月に年次総会を開催し、隔年で役員を改選\*<sup>4</sup>しています。

2002年7月、台東区谷中に東京事務所を移転し、10年5月、近くに再移転しました。

### ■ 理事会

1999年から年2~3回、理事会を開催し、活動、組織運営などを話し合っています。2008年の年次総会で、役員体制を見直して、議決には加わらず、運営に意見を出す準理事を置くことが提案され、1年の施行後、2009年に承認されました。

### ■ 監査

ナイロビ事務所では監査法人による外部監査、東京事務所では監事による内部監査を行なっています。

2011年、(特活)国際協力NGOセンターによるアカウントビリティ・セルフ・チェックを実施し、ASC2008マークを取得しました。

\*1 理事—石井優子、工藤孝明、國枝信宏、國枝美佳、佐伯邦子、佐久間典子、澤田祐介、陶山賢治、津嘉山(現在、梶)奈央子、中塚史行／監事—加藤志保

\*2 申請当時、名称にアルファベットは使えなかったため、外したCanDoを略称として使っています。

\*3 98年の理事に、南部良一、明城徹也、矢澤宏之の3名が加わりました。

\*4 2012年の改選で、理事7名、準監事5名、監事2名を選任。これまで他に10名が役員を務めています。理事—中沢和男、藤目春子、山脇克子、竹直樹、野木美早子、川越朋子／準理事—高木加代子、橋場美奈、景平義文、満井綾子(理事から監事、準理事に変わった役員もいます)。

\*1 ブックレットと電子ブック『ケニアの人々』は勉強会の記録をもとにまとめています。

\*2 2009~10年、フレンズ。

## スタッフ

### ケニア:

**事務所代表**\*1—國枝信宏、明城徹也、永岡宏昌(兼任)

**調整員**—中塚史行、國枝美佳、津嘉山奈央子、山脇克子、藤目春子、嶋本恭子、永野甲人、橋場美奈、野木美早子、中村由輝、三木夏樹、満井綾子、道山恵美、高木加代子、橋場美奈、景平義文、西森光子、石田純哉、伊東彩、小山杏菜

**専門家**—佐伯邦子、石井優子、吉田真季子

**調整員**—エバンス・カランガウ、カンダリ・ムロンジア、ビクトリア・ムニヤ

**調整員助手**\*2—ベンソン・ンズキ、カンダリ・ムロンジア、ロバート・シエンゴ、ダニエル・ムタティ・ムシヨキ、アントニー・ワイナイナ、ピーター・カランバ・ムワリヤ、ビクトリア・ムニヤ、ジャフェス・ムテミ、パトリック・マサイ、フランシス・ムワンジ、レイン・ムティンダ、エスタンドウ、レンソン・ムタンギャ、グレース・ティタス、ジャネット・マカウー、エリザベス・ムニヤシャー、ジョサイア・キトンガ、フレデリック・ザンギ、レベッカ・ムワンガンギ

**インターン**\*3—若林昭吾、藤田明香、堀内綾、橋場美奈、嶋本恭子、山脇克子、藤目春子、荒石真生、長浜みぎわ、森田紗代子、三木夏樹、満井綾子、角免昌俊、渡辺裕史、伊藤祐子、道山恵美、佐久間隆、高木加代子、広谷樹里、高橋里佳、谷澤明日香、福田京子、鈴木美月、安井弘美、中村香、緒方真美、池田健太郎、渡邊哲郎、茂野綾美、三上貴代、西森光子、福本友香里、諸泉友香、小山弥里、円城寺多慧、森本舞佳、荒井かず葉、小野珠代、野田恵理奈、藏野仁美、金澤規、平野香奈子、丸山吏乃、越智信一郎、千葉亜里紗、大谷佳代子、伊東彩、島崎梓、四登夏希、田涼子、梅本大介、北田美沙子、渡邊嶺也、廣本直希、小松映里佳、岡本優子、三浦明子、萩生田愛、藤原くみ子、水口夏希、竹下加奈子、横田陽紀、小林由佳、山越泰斗、小山杏菜、鬼頭景子、山田夏子、合田暁良、福田幸、才田恵里奈

**専門家**—マーティン・リリア、アイザック・マシボ、ガブリエル・キエンゴ、ラファエル・キオコ、フランシス・ムエンドワ、ミルトン・キヒマ、キエマ・ムワンガンギ(以上、施設拡充)、ジャフェス・ムクンガ、オネスマス・ムトウワ、トーマス・ムシラ(以上、環境)、ジョセフ・チャロ、フランシス・カレリ、ミルカ・カワシア・ゾビ、アグネス・ムモ、ジェイムズ・キズク、スーザン・キジカ、ベンジャミン・カムティ、エリザベス・グリ、ジョセフ・マルキ(以上、保健)、マーガレット・ムトウンガ、クリスティン・ダイナ(以上、教育)

### 東京:

**代表理事**—永岡宏昌\*4

**事務局長**—國枝信宏、山脇克子、玉手幸一、久保内祥郎

**事務局員**—津嘉山奈央子、藤目春子、山脇克子、橋場美奈、野木美早子、勝保仁美、玉手幸一、佐久間典子、道山恵美、景平義文

**アルバイト**—諸泉友香、前川昌代

**インターン**—野津志乃、満井綾子、永田仁美、井本佐保里、樋惇紀

**ボランティア**—佐久間典子、藤田明香、種村英大、諸泉友香、三沢陽介、道山恵美、茂野綾美、小野珠代、喜田大輔、玉手幸一、若林昭吾

\*1 会報では、1999年10月まで「駐在員」として掲載。永岡は「事業責任者」として兼任。

\*2 調整員に昇格した場合は、両方に記載。

\*3 98年はボランティアの位置づけで、99年からインターン。2004年から現行のインターン制度。修了後、調整員になった場合は、両方に記載。

\*4 98年は事務局長を兼任。

## 元スタッフからのメッセージ 心に残る、こと・ひと・ことば

### ○こと

**國枝 信宏**—携帯電話普及前のケニアで、電話開設は初代駐在員の大きな悲願。役所や業者との折衝には、公衆電話と乗り合いバスを駆使。東京とは、知人に電話回線を借りてメールと電話。開設申請から半年後、電話公社から「あなたの番号はこれです」。喜びも束の間、後日その番号が他人に渡ったと知り、ついに切れた堪忍袋の緒。言い訳を並べる担当者とその上司の前で、平手で机をバンッ！その後2週間で電話開設。机を叩くなんて人生最初で最後？

**國枝 美佳**—15年前、CanDoのアイデンティティを決めるプロセスに参画した。そして皆でCanDoの理念を決めた。1. 豊かさは地域住民自らが定義する 2. 我々はあくまでも外部者、地域開発の触媒ではない 3. 依存心を植え付けないために、10年後にexit(撤退)するそこからの15年を渡り歩いてきて思うことは、上記に挙げた3点がいづも心のどこかにあり、いつの間にか太い柱となり、今も自分を支え、指針となっていることだ。

**山脇 克子**—ケニアで過ごした時間のなかで、思い出すことは多々あるものの、意外とプロジェクトに関係のない些細な出来事が多いものです。そのなかでもムイ郡での一般女性向けの基礎保健研修を初めて実施した日のことです。「集合時間の告知は予定の2時間前に」という冗談が存在するケニアで、開始時間より前にほぼ全ての参加者が到着し、一人に一冊ずつのテキストとノートを配布し、講義を開始すると、食い入るように講師を見つめ、少女のようにノートを取るお母さんたちの姿がありました。CanDoはそれ以前に小学校で教科書配布をしていたため、自分専用のまっさらなテキストとノートを持つのは初めてかも知れないこと、小学校卒業まで就学できなかった参加者もあ

\* 右欄に近況

1998年—駐在員/99~2003年—事務局長  
「セネガル教育省で、JICA派遣専門家として、地域社会に根差した学校運営委員会の全国普及プロジェクトを運営」

1998年—調整員  
「ユニセフ職員として中西部アフリカ地域のポリオ撲滅や予防接種事業への住民参加を促進する仕事に携わる」

2000年—インターン/01~02年—調整員/03~10年—事務局員~事務局長  
「2011年より、(特活)シェア=国際保健協力市民の会の東京事務所で、パート職員として勤めています」

ることに思い至り、一般の女性にとって、知識を得る機会がとても少なく、この機会を大切に思ってもらっていることを実感しました。それまでの中央型、リーダー型の研修と異なり、各地域に外向き小規模の研修を数多く実施し、多くの女性たちに修了まで真剣に参加してもらったことは、私にとっても心に残る活動となりました。

**石井 優子**—ヌー郡、ムイ郡に幼児育成専門家として村に入っていた時のことです。聞き取り調査である家庭を訪問したとき、2年生の男の子が料理を作っていました。話によると、兄がバオバブの木から落ちて動けなくなりベッドで寝たきりになっているとのこと。「お兄ちゃんの命が続く限りぼくは料理を作って食べさせてあげるんだ」と、兄の限られた命と真剣に向き合い、今の自分にできることを精いっぱいやっている姿が印象深く心にのこっています。

**三木 夏樹**—権力者による学校運営の独占、汚職、欠陥工事、住民との振り返り、活動の再始動—七転八倒の末、ようやく住民が声をあげたトゥバーニ小学校の教室補修活動。学校開発を阻止してきた権力者の他界後、「自分達が受けられなかった教育を子供たちに」と保護者に取り組んだガンガニ小学校の教室建設活動。保護者の離散を経て、「去って行った保護者に戻ってきてほしい」との思いで学校再建のスタートを切った、ピア小学校の教室建設活動。みんな必死でした。

**中村 由輝**—心に残っている出来事は、突出した出来事ではなく、日常の活動と現地の人との話合いです。一つ一つ覚えているわけではないけれど、その日常が現地の人との付き合い方を、物事の理解の仕方をお互いの考えを理解しようという姿勢の大切さを教えてくれました。受け入れてもらおうと迎合するのではなく、一人でやろうと傲慢になるのではなく、ただお互いに納得のいくまで時間をかけて話し合いの機会をもつ。それが今の私の宝物です。

2001年、04年、05年—専門家  
「北海道の大自然に囲まれながら JICA 北海道(帯広)センターにて市民参加協力調整員として勤務しています」

2003年—インターン/03~07年、08年—調整員  
「(特活)ヤウダゴベ共同代表(ニジュール)。傍ら、8月からベナンに出稼ぎ(貧乏対策)。  
趣味:現場 苦手:書類」

2003~04年、05年、06年—調整員  
「開発コンサルタント。2008年~2013年 JICA の南スーダンの教育支援プロジェクトに携わり、6月帰国しました」

**高木 加代子**—CanDoと出会ってから8年ですが、一緒に働かせてもらったみなさん、多くのトレーニングや村訪問、たくさんのもめごと、飲んで食べて語った夜が思い出されます。そのなかで敢えてひとつあげるとすれば、現場での「チャイタイム」です。ちょっとひと休みしながら、お茶屋さんでの様々な人との議論や雑談含め多くの会話一つひとつが、今もふと思い出され(思い出し笑いなんかもしつつ)、今の自分に原体験となってつながっています。

**玉手 幸一**—ケニア出張の折、ムインギの村のちいさなホテルの中庭で、反省会をケニア人スタッフとしていた時、子どもを背負った若い母親の子守唄が聞こえてきたことがあります。私が子どもころに聞いた子守唄の調べに似た、妙に懐かしい、古き日本の田舎を彷彿とさせる子守唄でした。いまでもその時の歌声を思い出すことがあり、とても懐かしく思い出されます。

## 〇ひと

**梶(津嘉山)奈央子**—私は1998年に調査員としてナイロビに派遣され、スラムの調査をしました。約5ヶ月間にわたる調査の中で一番印象に残っているのは、蒸し返るような暑さのスラムの中を裸足で駆け回り、ゴミが散乱する地べたに座ってご飯を食べている子どもたちの姿です。あの子たちは今頃どんな大人になっているのだろうかと思いを馳せませす。当時、会が支援していたスラムの高校生たちも家族や仲間と健康に暮らしているいいなと思います。

**嶋本恭子**—事業地での仕事を通して多くの方にお世話になり励まされた中で、ある行政官からたくさんの支援や助言を受け、学んだ事がとても多かったです。同地区のご出身で、幅広く地域の方に支持され慕われている様子がいつも伝わって来ました。暑い屋下がりにチャイをご馳走になった時など、広く地域の課題について、妊産婦保健についても教えていただいた事は同分野に携わる意欲にも繋がっています。

2005年—インターン/06~09年、11年—調整員  
「CanDo 後は協力隊経験の後、大学院に進学・卒業、今は国内の開発コンサル会社に所属し、エチオピアで技プロ案件従事中です」

2010~11年—事務局員~事務局長  
「世界の医療団に所属。福島県(南相馬、川内村)でこころのケアプロジェクトにかかわっています。まだまだ、被災地は復興途上です」

1998年—事務局員/98~99年—調整員  
「9月より1年間、家族でイギリスに滞在することになりました。現地でもアフリカと何らかの縁があり、繋がりを持てればと思います」

2000~01年—インターン/01~03年—調整員  
「米国大学院にて、アフリカでの出産ケア使用の諸要因について女性の地位とエンパワメントを中心に研究中」

**藤目 春子**—アフリカがどんどん悲しい場所になっていく—CanDo 退職当時の気持ちです。会員番号1番の南部さんが亡くなり、そのショックを持って余っていた頃でした。他にも、いつも事務所近くにお世話になったタクシー運転手。現場の宿屋のオーナー。そして、一緒に何度も現場の小学校を訪問し、活動を作っていた専門家。6年間で、身近な人を4人も亡くしました。ケニアで生きることの厳しさが、身にしみた出来事です。

**石田 純哉**—「心に残るひと」、ケニア人含めたくさん出会いました。印象の善し悪しがあったとしても、皆様、垣間見える内なる想いは純正で尊敬するものでした。私にとっては Easter Brook 会計事務所、チョーハン会計士の存在が大きいものでした。会計業務に限らず、税務、労務など様々な場面で指導していただき、監査時には必ず、カレーなどを持ち込まれ、緊張する監査の場面においても陽気に振舞われ、その人格からも学ぶことが多かったと思います。

### ○ことば

**橋場 美奈**—CanDo での経験で印象深いことは、初めてケニアに着いた日のナイロビです。ケニアの夏の2000年1月で、全てがキラキラして見えました。永岡さんが「いい所だよ。」と言っていたのは本当だったと感じました。その後、2度ほど CanDo に戻り色々な仕事をしました。第一印象からケニアに対する思いは変化して、浮いたり沈んだりして13年後の今日もまだケニアにいるわけですが、最初の日のイメージが最も鮮明に心に残っています。

**道山 恵美**—「私たちスゴイでしょ。」—キャラモコ村のオバちゃんに言われたセリフ。「CanDo ありがとう」と言われても悪い気持ちにはならないけど、自分たちの取り組みを自慢された時はもっと嬉しい気持ちになった。自分たちは援助のお礼を述べられる感謝の対象ではなく、一緒に活動する対等のパートナーとして見てもらっているんだな、と。

2000~01年—インターン  
/01~06年—調整員  
「退職後、アフリカへは2度戻りました。今はアフリカから離れ、南アジアと日本で活動する NGO で働いています」

2011~13年—調整員  
「2013年6月下旬から日本工営株式会社、現地業務調整員としてケニア北部で干ばつプロジェクトに従事」

2000年—インターン/02年、06~09年—調整員  
「2010年から、ケニア・ナイロビで「少年保護関連職員能力向上プロジェクト」で JICA 専門家として働いています」

2005年—インターン/06年、08~09年、10年—調整員/12年—事務局員  
「日本の人たちと一緒に途上国の問題について考えていきたいなと思って今も NGO で働いています」

## 支援・事業委託元の機関・団体



他に、OA 機器、インターネット関連のご支援をいただいています。

## 支出総額の推移



15年間の支出総額は4億5070万円になります



2010年7月撮影

---

### CanDo15年の歩み

2013年9月25日発行

発行: 特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会 (CanDo)  
〒110-0001 東京都台東区谷中2-9-14 第2森川ビル B号室

電話/FAX: 03-3822-1041

電子メール: [tokyo@cando.or.jp](mailto:tokyo@cando.or.jp)

ウェブサイト: <http://www.cando.or.jp/>

郵便振替: 口座番号 00150-2-15129 加入者名 アフリカ地域開発市民の会

---